

あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。

(マタイによる福音書 18章12-14節)

皆さんは、このたとえ話を読んでどう思うでしょうか。私は中学生の頃にこの話を読んで、山に残された羊が襲われたらどうするのだろうか、捻くれた感想を持った覚えがあります。

もし自分が迷い出た一匹の羊であれば、「迷い出た」のであって好きではぐれた訳ではありませんから、自分に責任はないと思うでしょう。むしろ、九十九匹の方が自分を見捨てたと思うかもしれません。独りで受験勉強をしている時、教室に入れない時、学校に行くのが辛い時などの場合を思うと、この迷い出た一匹の羊の気持ちがよくわかります。

一方で残された九十九匹は、この一匹が勝手に迷い出たのであって、自分たちには責任はないと言うでしょう。99%の者はきちんとついてきており、迷い出るのは注意が足りないからであり自己責任だ、自分たちは山に放置され迷惑を被ったと言うのではないのでしょうか。

弱者は必要な努力をしなかったから弱者になったのであり、努力をすれば苦しい状態から抜け出せるはずであるから、このような人々に税金を使うのは無駄であるという主旨の、いわゆる自己責任論にしばしば出会うことを思うと、今の日本は、この九十九匹の理屈が主流になっているように思います。

この稚拙な自己責任論の欠点は、1%の人にも人格があることを無視している点です。野生動物の保護であれば、群全体の何%が生き残った、という評価が可能ですが、人間はそうはいきません。40人のクラスが災害のため校庭に避難することになり、あなたが逃げ遅れたとします。点呼を取った担任の先生が「一人(つまりあなたが)いないけど39人は逃げ切ったからまあ上出来だろう」と言ったとすれば、あなたは今後この担任の先生を信用することができるでしょうか。

羊飼いは、百匹の羊全てに責任を負っています。一匹でも失うことは、自分の責任を損なう重大な問題なのです。一匹が迷い出たことをその一匹の責任にすることなく、九十九匹の安全の為にと言って責任逃れをするのでもない。誰に転嫁することなく全ての責任を自己のものとして背負うこと、これが真の自己責任です。

自分が全ての責任を負っていると自覚する人は、クラスの中に苦しんでいる人、いじめられている人、不登校の人などがいれば、責任を感じ、その人を放置することができません。この責任感から生まれるのがリーダーシップです。リーダーが自分に責任を負ってくれているとメンバーの一人一人が実感することで、メンバーにも集団に対する責任感が生まれ、チームとなるのです。

リーダーは、メンバー全てに責任を負っている訳ですから、集団を形成する個々人の痛みを自分の痛みとして感じなければなりません。国民の中に貧困や差別があり、傷んでいる人がいることを知りつつ、その痛みを自己責任に転嫁して多数派の利益を優先する人は、国のリーダーには全く相応しくないのです。

一人の人が全ての人の痛みを知ることは不可能ですから、真のリーダーはイエス・キリストしかいないことがわかります。それが「主は私の羊飼い」(詩篇23篇)ということです。それでもなお、知ろうと努力することはできます。世界には様々な弱さや痛み、困難を抱えた人々が数えきれないほどいます。世界で活躍する本当のリーダーとなるために、清教学園での生活と学びを生かし、世界に興味を向けて欲しいと思います。